

いつでもどこでも移動大学

——川喜田二郎先生にいただいたもの

安溪遊地（あんけい・ゆうじ）

川喜田二郎先生に初めてお会いしたのは、1972年の夏、青森県の鱒ヶ沢町で開かれた第10回の移動大学の参加者としてでした。その時以来今日まで、移動大学にいただいたものの大きさに感謝しつつ、謹んで先生のご冥福を祈ります。

大学1年生の5月病が慢性化し、3年生になっても、専門の生物学で何がしたいのか分からないという挫折感をもって私は、移動大学という二週間のキャンプが小笠原で開かれるという知らせをもらって、参加を決意しました。1972年のことです。きっかけは、梅棹忠夫さんの『知的生産の技術』（岩波新書）を読んで、アイデアを小さい紙片に書きつけて組み立てる「ござね法」を知り、それを洗練させた川喜田二郎先生のKJ法というものがあるというので、KJラベルを注文したことでした。そのついで、ダイレクトメールが届いたのです。十分な水がないことを理由に小笠原移動大学が中止されたあと、青森で開くという知らせがきました。始めから青森だったら参加していなかったかもしれませんが、108人の参加者が2週間のキャンプ生活をするという岩木山中に向かいました。

6人ひと組のテント生活。フィールドワークやKJ法と夜の語らい。そこで出会ったのは、それまでに味わったことのない開放感から、すっかりくつろいで腹の底から笑っている自分でした。チームのメンバーが焚き火を囲んでいると、川喜田先生が空いたところに座って、いろ

いろなお話をしてくださいます。話しながら先生は、よく顔をしかめられたのですが、席があいているたき火の風下は、いつも煙のくる場所だからだと後で気付いたものでした。KJ法の作業がなかなか進まないでいると通りかかった川喜田先生が「お、これは大変だぞ！」と、例のちょっととぼけたような声で言われたのが印象に残っています。

時刻表を見ることも、写真を撮ることもまったく経験がなかった私でしたが、気がついた時には、翌年の夏、新潟で開かれる第11回角田浜移動大学の準備スタッフとなって、写真係を引き受けていたのでした。あまり自宅にはいなくて、開催までの半年のうち、東京タワーの下あたりにあった、通称「城山アジト」という家や、新潟などに100泊したことを覚えています。ひきこもりで大学に行かない「寝たきり学生」だった私が、こんどは「蒸発学生」になってしまったと、母はぼやいていたそうです。



1973年、角田浜移大でのKJ法の講義
（左端が川喜田二郎先生）



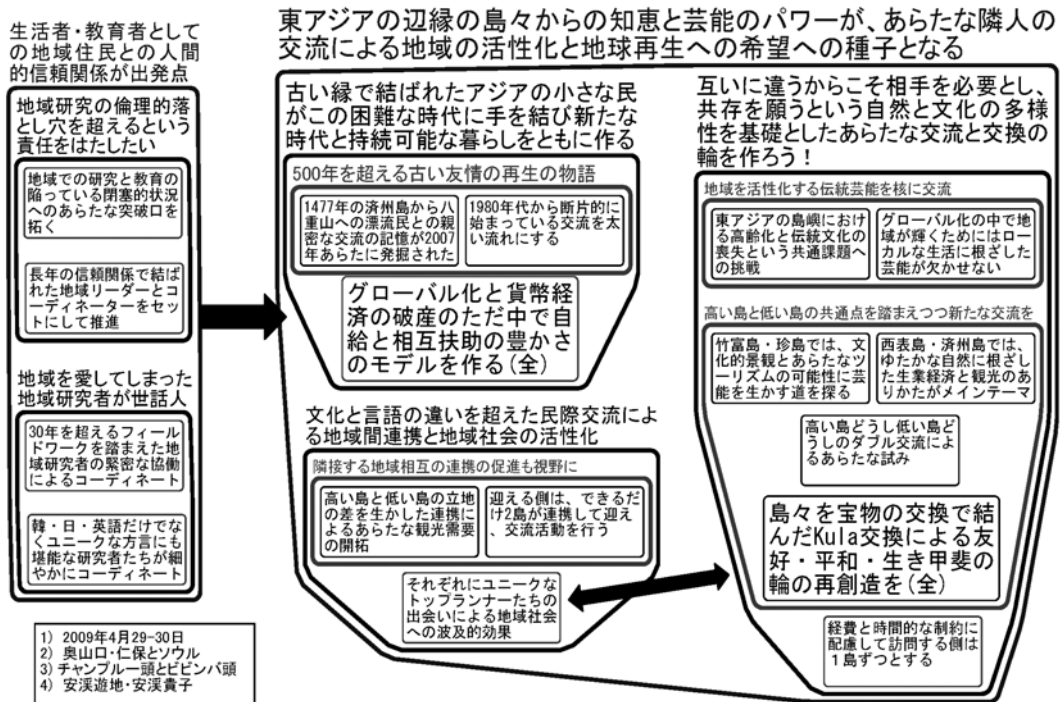
スタッフ会議で角田浜移大を批判する
(参画協会城山分室にて)

移動大学の8つの目標のうちで「人間性開放」や「雲と水と」に惹かれていた私は、アフリカでのフィールドワークにあこがれて大学院に進みました。KJ法そのものは苦手でしたが、移動大学のご縁で結ばれた妻の貴子が、ていねいに教えてくれました。1981年に沖縄の大学に就

職して、学生たちと公設市場のフィールドワークをしました。その成果を合宿して累積 KJ 法でまとめあげ、つくば大学に在職中だった川喜田先生に図解をお見せした時「うん、きみらの KJ 法は本物だ」と言われた時は、身がひきしまる感じがしました。

その後は、西表島やアフリカの論文を書いていて先が見えなくなった時、屋久島につどった若者たちと地域課題の解決策を考える時など、ここ一番という時に、KJ 法がその威力を発揮する場面に出会います。今は、韓国ソウル大学校の全京秀(チョンギョンス)先生と知り合って、新しい国際プロジェクトの夢を育てているところです。そんな異質の交流の場面では、やはり KJ 法での意思疎通が有効なようです。(筆者の URL <http://ankei.jp>)

济州島・西表島と珍島・竹富島の韓日4島芸能交流による地域の活性化 ——500年の友好の歴史に根ざした新たな協働のパートナーシップを求めて



いま見ている夢を図解にしてみました。大きなラベルは全京秀先生から